

【香川】「人の生死は文化を超える」工学部卒から医師を志した理由-渡辺大・三光病院医師に聞く◆Vol.1

インドからの帰国後、地元・香川で「場づくりをしたい」

2024年11月29日（金）配信 m3.com地域版

精神科医として診療する傍ら、古民家を購入・改装してゲストハウスを開設、ゲームクリエイターのコミュニティも運営するなど地域活動にも注力する医師が香川県にいる。三光病院（高松市）の渡辺大氏は工学部生だったころ、マザー・テレサが設立した施設を訪れたことで医師を志すように。同時に、地元・香川に魅力的な「場」をつくりたいとも考えるようになった。ユニークな活動を行う渡辺氏にその半生を聞いた。（2024年10月29日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)



渡辺大氏（本人提供）

「死を待つ人の家」の光景に衝撃、「死の悲しみは普遍」

——過去の記事によると、渡辺先生は岡山大学工学部を卒業後、2017年に大分大学医学部を卒業しています。まずは、医師の道を志した経緯をお聞かせください。

人の命につながる仕事をしたい——。そう思ったことがきっかけです。私は工学部の学生だった20歳のころ、自分の将来像をうまく描けていませんでした。自分にとって本当に価値のあることは何だろうと考えていましたが見つからず、「何かヒントを得られるかもしれない」と大学3年と4年の間に交換留学生としてタイの大学で学びました。この間、マザー・テレサがインドのカルカッタに設立した「死を待つ人の家」を訪れ、ボランティア活動をした経験により、医師になりたい気持ちが生まれました。

貧困や病気によって死の間際にいる人たちを看取っているこの施設では、毎日たくさんの方が運ばれ、亡くなっていきます。私はそれまで東南アジア諸国を回っており、さまざまなカルチャーショックを受けていました。しかし、この施設では亡くなっていく人を前に、そこにいる皆が悲しみ、涙を流していました。人の命を慈しみ、死を悼むこと。それは、文化を超えた普遍的なものなのだと痛感したのです。

——渡辺先生は大分大学医学部を卒業後、地元である香川県に戻り、四国こどもとおとなの医療センター（善通寺市）で初期研修を受けます。以来、香川で働き続けているそうですね。

先ほどお話ししたインドでの経験から、帰国後は「ずっと香川にしよう」と考えるようになりました。死を待つ人の家でボランティアをしていたころ、ふと地元の町並みが頭に浮かんだんですね。「この施設は自分がいなくても世界中から注目されている。それに比べて香川はどうか……」と考えたとき、地元で多様な人が集う「場づくり」に携わりたいと思うようになって。

思いの背景には、インドに住む人たちの声も影響しています。あくまで18年ほど前の話ですが、当時、利用するタクシーの運転手に「インドはどうですか？」と母国への思いを必ず聞くようにしていました。すると、ほぼ全員が「ひどい国だ」「汚いよ」と批判していて、悲しく思いました。そして、「香川出身の人が同じことを言っていたらきっと同じ感情を抱くだろう」とも想像しました。

専門里親や尊敬する医師と出会い、精神科へ

——初期研修の修了後、精神科を専攻したのはなぜですか。

初期研修を受けるまで、専門にする診療科については救急、小児、精神科で揺れていました。医師になりたいと思った当初、患者さんの命を救いたいと救急を志望しましたが、医学部生になった後にまた自分の価値観を変える出来事があったんです。

それは、「専門里親」との出会いでした。専門里親とは、虐待された児童や非行などの問題がある児童、身体障害・知的障害児など専門的なケアを必要とする子どもを養育する里親です。大学の後輩のご実家が専門里親として活動しており、虐待されて保護されるなどした子たちを育てていました。私は定期的にそのお宅に行って子どもたちと遊んでいました。そして、子どもたちとある程度関係性ができてからお母さんにその子たちの過去や背景について聞いたのです。「日本にここまでつらい生い立ちの子がいるのか……」と知った私は、子どもと人の心に寄り添える小児科、精神科の道も考えるようになりました。

最終的に精神科を選んだのは、初期研修先だった四国こどもとおとなの医療センターの児童心療内科で牛田美幸先生の診療を見たためです。牛田先生は親子関係の問題についてカウンセリングを重視しながら解決を試みていました。その丁寧な診察や、言葉の力で親子が癒えていく様子を目の当たりにしたことが決め手となりました。

自身の特性生かし、ネット・ゲーム依存症の子を診療

——渡辺先生は2024年1月から精神科医療に注力する三光病院で働いています。現在の担当分野は何ですか。

依存症全般を診療している中、特にネット・ゲーム依存症の子どもたちの診療に重きを置かせてもらっています。私は小学生のころからゲームが好きで、当時からゲームクリエイターに憧れていました。それが高じて医学部卒業前にはプログラミングスクールに通い、2018年には県内の学生と社会人が参加するゲームクリエイターたちのコミュニティ「讃岐GameN（げーめん）」を立ち上げました。ネット・ゲーム依存症の対応は「医療×ゲーム」という私の特性を生かせる分野だろうと思い、病院に希望を出して担当を割り振ってもらっています。この症状の背景には私の関心事である親子関係の問題がよく出てくるので、やりがいがありますね。

なお、当院の海野順院長はネット・ゲーム依存症対応の第一人者でもあり、2024年11月17日に讃岐GameNが高松市南部の3つの商店街で開催するお祭り「SANUKI X GAME」でゲーム好きの子を持つ保護者と海野院長、讃岐GameNのメンバーがゲームとの付き合い方について対話する企画も行います。地域でのこんな取り組みも、私が追求する「場づくり」の一環です（『【香川】依存症の認識が希薄な香川県でネット・ゲーム依存症専門外来を設置したワケ-海野順・三光病院院長に聞く◆Vol.1』を参照）。



過去の「SANUKI X GAME」の様子（本人提供）

◆渡辺 大（わたなべ・だい）氏

岡山大学工学部を経て、2017年大分大学医学部卒。四国こどもとおとなの医療センターでの初期研修終了後、精神科を専攻。2014年1月から三光病院に勤務。地域活動にも注力しており、2018年からゲストハウス「燈屋」とゲームクリエイターのコミュニティー「讃岐GameN」を運営する。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

